

『しまねの草花』に記録された珍品ラショウモンカズラの再発見

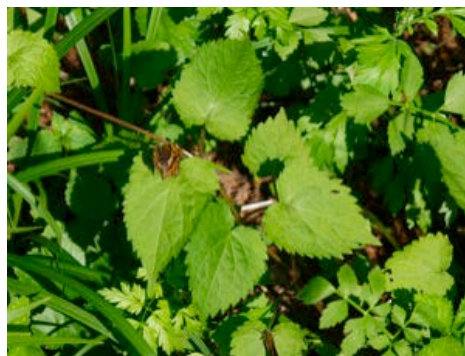
三浦憲人（ホシザキ野生生物研究所）

昭和 60 年山陰中央新報社発行の丸山巖著・林亨写真『しまねの草花』の 23 ページに、ラショウモンカズラが写真付きで紹介されている。その説明文の最後に「県下にはこれに葉形も花色も異り結実しない珍品の群落がある」と記述されている。

これまでに、ラショウモンカズラを含むシソ科植物の研究を行ってきた中で、本種に染色体数 18（二倍体）と 27（三倍体）が存在していることがわかっている。そして三倍体は、花粉が未形成であると同時に結実もしない。また、二倍体と三倍体とでは形態に明らかな違いが存在している。この形態の違いは、『しまねの草花』の記述と一致しているところがあるため、染色体数の確認を含め、島根県において調査を行った。

これまでの調査の中で、丸山氏が珍品として扱ったと思われる標本が、京都大学附属博物館標本庫において見つかった。その標本は、奥出雲町吾妻山産であった。しかしこの標本は、村田源氏によって通常のラショウモンカズラと同定されていた。この標本の情報をたよりに、吾妻山周辺において調査したところ、そこに生育している個体が二倍体であり、結実することがわかった。

その後、島根県内の中国山地沿いを何カ所か調査していたところ、浜田市旭町志木早水溪谷入口のスギ林林床において、花の咲いていないラショウモンカズラの群落を発見した。その個体を見てみると三倍体の葉の特徴をもっていた。その後、染色体を観察したところ三倍体であることが証明された。島根県内においても三倍体が存在していることが明らかになったと同時に、丸山氏が三倍体を珍品とした可能性があるのではないかと考えられた。来春は花を観察し、赤花であれば丸山氏が記録した群落が、この場所である可能性も考えられる。



島根県内において発見した 2 種類のラショウモンカズラ。左；二倍体，右；三倍体。